

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

## 言語学

YAMAZAKI, Tatsuroh / 山崎, 達朗

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

75

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

427

(終了ページ / End Page)

453

(発行年 / Year)

2007-07-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003119>

【経済学研究のしおり（第三回）】

# 言語学

山崎達朗

## 1. 言語学の立場と領域

### 1.1. 言語学の立場

**言語学 (linguistics)** はいろいろな言語を科学的に分析する学問である。私個人としては言語学全般というより英語学が専門なので、例文や説明はほとんどが英語について、ということをご了承願いたい。まず言語学に関して、よくある質問 (FAQ) から取り上げてみる。

- ① 言語学ではことばの乱れを直さないのか？
- ② 言語学は文学など、書かれたことばを研究する学問ではないのか？
- ③ 言語学者はいろいろな言語を話せないといけないのか？
- ④ 言語学と英語学の関係は何か？

①の疑問に関しては、現代の言語学ではその考え方はとらない、ということになる。言語学はことばを規制するのが目的ではなく、**現実に使われていることばをありのまま観察し記述する**という基本的なスタンスをとる。あくまで「記述的」であって、規範的にあるやり方に従いなさい、というような考え方はしないのである。

そもそもことばは移り変わるのがしぜんである。たとえば今の英語から古英語（700–1150）を見れば、当時は名詞に男性・女性・中性の区別があり格や数によって語尾変化もあった。それが中英語（1150–1500）では文法的性の区別が失われていき、語尾変化も単純化されて、今の英語に至った。その変化は乱れとみなすのではなく、時代とともに使いやすいうように移行してきたということなのである。日本語においても、今の若者のことばは乱れてきている、という言いかたをする人がいるが、多くの人が受け入れれば、それは「ことばが変化した」という意味なのである。逆に、社会が受け入れなければ、それらのことばは淘汰されていくだけである。

②については、以前の言語学は philology（今では「文献学」と訳される）とよばれ、確かに文学作品のように書かれたことばが主な研究対象であった。しかし19世紀半ば過ぎから話しことばが導入され、linguistics という呼称が定着した。現代の言語学では書きことばより、**話しことば（＝音声）をより基本的なものとする**。その理由として、文字をもたない言語はあるが、音声のない言語はないからである。また、赤ちゃんが言語を獲得していく過程で、まず話しことばが先にくることは、言うまでもない。それに対し書きことばは音声を記述して時空を超えてメッセージを伝達するという副次的な役割なのである。

③言語学者に対しては、何ヵ国語話せるのですか、という質問が時々でる。これは質問が妥当ではない。多言語に習熟している人を polyglot（ポリグロット）というが、それは言語学者になる条件ではない。ひとつでも**言語という対象を記述・分析できれば、言語学者の条件は満たす**（舞台に立つアーティストと音楽評論家は別ものだといえれば納得してもらえるだろうか）。もちろんたまたま多言語に習熟していればそれが言語学者として役に立つこともある。音韻や文法、意味などで比較対照がより幅広くできるという利点はある。事実、19世紀には何ヵ国語も使いこなす言語学者たちがいたようである。

④の言語学と英語学の関係については、「一般」と「個別」の違いがあて

はまる。言語学はその対象となる言語は単数ではなく、いろいろな言語に共通したテーマを取り上げる。これは**一般言語学**と呼ばれ英語名は **general linguistics** である。それに対し英語学は **English linguistics** という英語名が示すように英語の言語学である。従って、こうした**個別言語学**には日本語学やドイツ語学、ロシア語学などもある。

さらに、英語学を英文学と類似しているものとみなす学習者がいるが、これらは直接の関係はないといっていくらいである。前者は対象言語そのものをいろいろなレベル（音、語彙、文、談話など）で記述・分析するものであり、文学書を分析するのが主な目的ではない（たまたま文学を一対象として文体などを論じるものはある）。

## 1.2. 言語学の領域

言語学のカバーする範囲は言語学固有の分野から学際的なものまでいろいろある。言語学固有の分野として、単位の小さいものからまず**音韻論 (phonology)**、**形態論 (morphology)**、**統語論 (syntax)** がある。

音韻論は言語音の研究をする分野であるが、各言語で単語に意味の違いを決定する音（=音素）が研究対象である（日本語や英語にとって /p/ や /t/ や /k/ などは音素である）。音素は単語に意味の違いはもたらすものの、音そのものに意味があるわけではない。

つぎのレベルは形態論である。形態論は**形態素**（=意味を持つ最小単位）や語彙の構造を研究する学問である。従って**接頭辞**、**接尾辞**、**語彙**はもちろん、**複合語**などの研究もここに属する。

さらに次の大きな単位を扱う分野は統語論である。これは文構造を研究する分野でいわゆる狭い意味で「文法」といわれるものである。現在では人間がいかにか文法を獲得し、無限の文を生成できるかという**普遍文法 (universal grammar)** に長く関心が集まっている。

上述の3つの分野以外に、言語学には意味を研究する領域が存在する。**意味論 (semantics)** と **語用論 (pragmatics)** である。意味論ではいわゆ

る辞書的な意味を扱う。意味は言語の重要な位置を占めるのにもかかわらず、その主観的な性質からなかなか科学という枠組みには収まりにくく、上の3つの分野と比べ、研究は遅れがちであった。語用論は比較的新しく発展した学問で、従来の意味論では扱いきれなかった文脈上の意味を研究する。話し手が言いたい「言外の意味」などはこの分野で取り上げられる。

以上の分野のほかにも言語学に関係する学問はたくさんある。たとえば学生に直接関係してくるのが語学教育などでなじみの**応用言語学**である。言語学の理論を教育の現場で応用して効果を最大限にあげるなどの狙いである。さらに**社会言語学**（方言、敬語など）、**心理言語学**（言語習得、言語障害など）、**言語人類学**、**神経・生理言語学**など学際的な関係がある部門が多いのも言語学の特徴である。

以上、スペースの限界を承知で言語学を概観したが、つぎにいくつかの分野についてもっと具体的に説明したいと思う。言語学プロパーの分野から音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論、学際的な分野から、社会言語学を代表させて説明していく。各分野とも網羅的に記述するのが目的ではなく、なるべく身近な興味ある現象を取り上げてみる。

## 2. 音韻論

### 2.1. 音声学と音韻論

音を扱う分野に**音声学**（**phonetics**）と**音韻論**がある。この二分野は音という共通項はあるものの、別物である。まず、音声学は音韻論の基礎になるものであるが、物理的な音すべてを対象にして、どの器官でどのようにして音を出すか（**調音音声学**）、それが空気中でどのように伝わるか機器で分析し（**音響音声学**）、そしてその音がどのように知覚されるか（**聴覚音声学**）に大別される。音声学は言語学にすっぽり収まる学問ではなく、医学や物理学などとも関係している学際的な分野である。それに対して音韻論

は言語学の一部で、(英語とか日本語とかの) 特定の言語体系のなかでことばの意味に影響のある音を分析し記述の対象とする。たとえば、英語の音の(記述的) ルールは音韻論で扱うということになる。さらに具体的に、つぎの一連の単語(特に〔p〕の音に注意して) 発音してみよう。

① pin	② spin	③ tip
-------	--------	-------

①の p 音は無声両唇閉鎖音というが、語頭なのでかなり強く読まれる。これをもっと細かい発音記号で書くと〔p<sup>h</sup>〕のような帯気を伴う音(つばが飛びそうな感じ)として認識される。②は s の後で p 音が帯気を伴わない弱い音〔p〕である。③の p 音は語尾でさらに弱い音となるか、あるいは唇を閉じたままで聞こえない(〔p̚〕と表示する)。

これら3つの p 音は音声学的や物理的には違うのだが、コミュニケーション活動にとっては、意味のある違いだろうか。みなさんもこれらを同音とみなしていないだろうか? そうだとすればすでに音韻論の世界にいる。つまり各々細かい音のバリエーションはあっても p は同一音として抽象的に認識しているのである。これを音素(phoneme)といい、音韻論では重要な抽象的概念である(斜線で挟んで表すのが慣例、/p/)。そして実際の発音である〔p<sup>h</sup>〕と〔p〕と〔p̚〕は、音素/p/の異音(allophone)といわれる。

## 2.2. 音節

単音の話から音の連続の話題に移ってみよう。英語の辞書をみると各語彙が音節(syllable)に分けられている。音節の定義は一つではないが、大体において母音(vowel)がひとつでその前後に子音(consonant)が付いた形を指す。音節の構造は日本語と英語ではだいぶ違う。日本語は基本的に単純で、V(母音のみ)か、CV(子音+母音)の形をしている(撥音や促音の説明は省略する)。ところが英語は複雑でV、CVのほかVC、CVC、VCC、CCVCなど多数ある。その比較だけで日本人には英語学習上、

つぎのような苦手な特徴が予想できる。

(例) 英語 日本語

① 英語の子音の連続に母音を入れてしまう。

script ➡ “su-ku-ri-pu-to”

② **閉音節** (子音で終わる音節) も **開音節**

(母音で終わる音節) で代用してしまう。 eight ➡ “e-i-to”

しかしこの単純な音節構造のおかげで、日本語では音節単位 (かな表記) の**回文** (=前から読んで後ろから読んで同じ文句) ができやすい。つぎのように無数に楽しめる。

ねるとふとるね (寝ると太るね)  
 つまんねえねんまつ (つまんねえ年末)  
 あなたにこのこにたなあ (あなたにこの子似たなあ)

一方、英語はアルファベット単位の回文であり、日本語ほど容易ではないと考えられる。しかしながらつぎのような名作(?)はある。

“Too bad, I hid a boot.” (悪いけど、私がブーツを隠したよ。)

“Was it a car or a cat I saw?” (私が見たのは車だったのか猫だったのか。)

### 2.3. 同化

英語の音韻現象を意識すると言語学は結構おもしろい。**同化(assimilation)** という現象がある。これは、隣り合った音どうしがある種の共通の性質を持つようになることである。つぎの3つの事象にはすべて同化が関与している。

- ① ‘of course’ の発音は、なぜ“オヴコース”ではないのか?
- ② ‘talked’ の発音は、“トークド”ではないのか?
- ③ ‘Gotcha!’ (ガッチャ!) って何?

まず①の ‘of course’ という句を発音すると “オヴ・コース” ではなく、“オフ・コース” のように**無声音**（無声音ではど仏に手を当てて、振動がほとんどなく、**有声音**では振動が手に伝わってくる）になるのはおなじみであろう。これは後続する語彙 course の語頭が [k] という無声音のため、直前の音が同様に無声音の [f] になるという理屈である。後ろの音が前の音に影響を与えるのでこの例は、**逆行的同化**と呼ばれる。

別例をあげると、基数 five と序数 fifth の関係にみられる。つまり ‘five’ の “ヴ” も ‘fifth’ では “フ” となる（\*fiveth ではない）が、これも同じ理屈で、後続する th 音 ([θ] という無声音) のため（有声音の [v] のままではなく）無声音の [f] になる。逆行的同化はもっとも一般的な同化作用である。

②の例として ‘talked’ や ‘walked’ の接辞 -ed の発音を取り上げてみよう。つづりにつられて有声音 [d] で発音してしまう学習者がいるが、これはその直前の音が無声音 ([k]) なので、-ed の発音も無声音 [t] になるのである。前の音が後ろの音に影響をあたえるのでこれを**進行的同化**という。実は規則動詞の過去形・過去分詞形はもっと体系的に次のように図式化できる。

#### 接尾辞 -ed の発音ルール

(直前の音)	(-edの発音)	(例)
1. [t] 以外の無声音であれば	⇒ 無声音 [t] になる	wash+ed, talk+ed
2. [d] 以外の有声音であれば	⇒ 有声音 [d] になる	beg+ed (=begged)
3. [t] [d] であれば	⇒ [ɪd] になる	want+ed, hand+ed

これ以外にはないから、便利な規則である。同様に、名詞複数形や動詞の「3単現」の -s にも平行したルールがある—— [s] , [z] , [ɪz] はそれぞれ直前の音の進行的同化により決定される。

③ ‘Gotcha!’ (ガッチャ!) は数年前フジテレビでよく使われた CM

なので、まだ多くの人の記憶に残っていると思うが、もともとは“(I've got you.”の発音つづりで、「ヤッター！」という意味である。単語 got の [t] と後続の you の [y] が合わさっても、そのどちらでもない [ʧ]([tʃ]) と表記することもある) という、口のより奥で発音される新しい音に変化する。このように、隣接する2つの音が出会ったとき、そのどちらでもない音を生み出す現象を**相互的同化**という。

### 3. 形態論

#### 3.1. 異分析

形態論で扱うのは**形態素 (morpheme)** という、**意味を持つ最小単位**である。形態素などと仰々しい名称を付けなくても単語や語彙でいいじゃないかと思うかもしれないが、同一の概念ではない。たとえば、環境問題に関係のある **burnables** (可燃ごみ) という単語は、直感的にさらに分割できると感じると思う。つまり {burn} , {-able} , {-s} の3つの要素の集合体ということである。それぞれの要素は意味をもっている。{Burn} は「燃える」、{-able} は「～できる」、{-s} は複数形を表す。これらがそれぞれ形態素である (burn や able は形態素であり同時に語彙でもある)。

それでは、ハンバーガー (**hamburger**) という語彙はどこで分割するか？ この質問は一見あまり興味をそそるようには思えない。予想されるように、二つの形態素 {ham} と {burger} に分かれるという解答が現在では正しい。しかし歴史的にはこの語彙の分析のしかたは違っていた (第一、この食品にハムは材料として使われていない)。もともとは {Hamburg} と {-er} (ハンブルク<市>のもの) という分割だった。それが現在の {Ham} と {burger} という分割に移行し、{-burger} がハンバーガーの意味を引き継ぐことになる。ここから cheese-burger (チーズバーガー) や beef-burger (ビーフバーガー) という語彙の存在が可能となった。こうした現象は**異分**

析 (metanalysis) とされる。

異分析は他にもある。たとえば **alcoholic** (アルコール中毒の) は、もともと {**alcohol**} と {-**ic**} とに分割されていたのが、{**alco**} {-**holic**} という分析に理解され {-**holic**} が「中毒性の」という意味を担うことになる。ここから **worka-holic** (仕事中毒の), **choco-holic** (チョコレート中毒の), **card-holic** (クレジットカード中毒の) などの表現が出現した。さらに **Pachinko-holic** (パチンコ中毒の) という単語も新聞で見たことがある。

### 3.2. 逆成, 頭文字語, 混成, 省略語

異分析の他にも形態素や語彙が形成される特徴的組み合わせが幾つかある。たとえば**逆成 (back-formation)** という現象は単語の一部が接辞として誤解されたために新しい単語が形成されることをいう。「編集者」は英語では **editor** というが最後の部分の **or** はこの語彙に限っていえば、単語の一部であって、「人」を表しているわけではない。しかし誤解により、この部分が切り離され、**edit** (編集する) という動詞が作られた。

逆成の別例: **peddler** (行商人) → **peddle**, **swindler** (ペテン師) → **swindle**

**頭文字語 (acronym)** も造語形成にはおなじみの手法である。これは複合語の頭文字を組み合わせると短く覚えやすい語彙にしたものである。例えば **SARS** (重症急性呼吸器症候群) は **severe acute respiratory syndrome** の頭文字を1シラブルの語彙として形成したもので、他に **AIDS** (後天性免疫不全症候群) や **scuba** (水中呼吸装置) も頭文字語である。特に興味深いのは小型四輪駆動車の「ジープ (**jeep**)」で、これが **general purpose (vehicle)** の頭文字語だといってもすぐに納得する人は少数だろう。しかしよくみると **general** の **g** は、発音を重視した綴りで書くと **jee** となる。ひとひねりしてあるが、結果として、**jee+p** で '**jeep**' の完成である。

**混成 (blending)** も語彙形成のおもしろい手法である。基本的には、複数の語彙の形態素にならない部分を組み合わせると別の単語を作るのである。有名なところでは「スモッグ (**smog**)」が **smoke** (煙) + **fog** (霧)

の組み合わせからできたというのがある。別例としては **brunch**(=**breakfast** +**lunch**) がある。最近では教育娯楽番組や図書のことを **edutainment** という。これも **education** と **entertainment** の合成で、英語の辞書にエントリーされる語彙になった。少し定義を広げて、**省略語** (複数の音節でできている単語の一部を省略して作成した語彙) も混成の一種とすることができる。たとえば「カラオケ (**karaoke**)」は日本語から英語に入った外来語であるが **kara** (空) + **oke** (<orchestra オーケストラ) で成立している (ついでながら、カラオケという発音はアメリカでは一般的ではなく、[キャリオウキィ] のように発音すれば通じる)。

### 3.3. 語源

形態素には意味があると前述したが、ここで**語源を利用した英語学習法**を紹介する。語源の形と意味を理解することによって語彙力増強が期待されるし、更に既習の語彙に関してもお互いの関連性が明確になる。文豪の森鷗外も語源学習はおおいに利用したと伝えられる。たとえば **structure** (構造) という単語を見てみよう。これは **struere** (建てる) というラテン語がもとになっている。つぎのように図式化できる。

#### 語源による語彙力増強の例 (図1)

<b>struct</b>	+	ure	= 建てたもの	➡	構造, 組織
建てる		名詞語尾 (結果を表す)			

よく考えると他にも **struct** が付く単語があったことに思いあたるはずである。つぎの図2を見ればすべて関連性があることがわかる。

## (図2)

**struct, stru** (=build, 建てる)

- ① con + **struct** = 共に建てる ➡ 組み立てる  
(=together, 共に)
- ② de + **struct** + ion = 取り壊すこと ➡ 破壊  
(=down, 下に) 名詞語尾
- ③ ob + **struct** = 反して建てられた ➡ ふさぐ, さえぎる  
(=against, 反して)

この方法で覚えるのは理にかなっており, 新しい単語にぶつかったときも類推が利く。特にギリシア語やラテン語源の語彙に有用である (例: ギリシア語源 anti<反対して>, hyper<越えて>, para<並んで>, syn<いっしょに>: ラテン語源 ject<投げる>, port<運ぶ>, scrib<書く>, sub<下に>)。語源で語彙力を増強しようという人へ, 読物, 参考書, 辞書などをつぎにいくつか紹介しておく。

文献案内 (語彙力アップ):

- 『Mini-Max英単語倍増計画』薄井明, 郁文堂 (¥1,400)
- 『語源とイラストで一気に覚える英単語』中田達也ほか, アスカ (¥1,680)
- 『Hyper語源とイラストで一気に覚える英単語』中田達也ほか, アスカ (¥1,785)
- 『英単語はこう覚える』森一郎・森基雄, 青春出版社 (¥850)
- 『語源でふえる英単語』山並陞一, The Japan Times (¥1,400)
- 『単語力アップ英語語源新辞典』小池直己, 宝島社 (¥933)

## 4. 統語論

### 4.1. 「文法」の意味合いと流れ

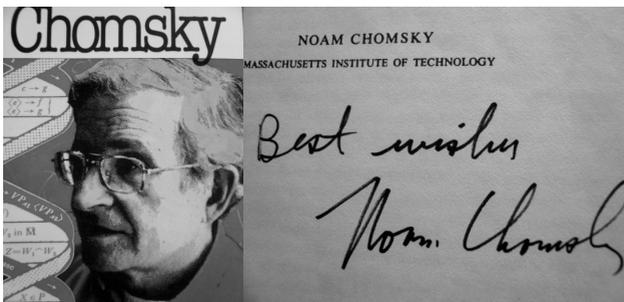
統語論は文の構造を研究する分野である。これは狭い意味の「文法」といわれるものである。しかしながら古代ギリシアやローマ時代は今の文法と比べても、かなり包括的な意味合いをもっていた。単語の形態や文中での単語の並び方、単語の意味や用法まですべて文法の一部であった。こうした2000年以上前からの文法を**伝統文法 (traditional grammar)**と呼ぶこともあるが、古いから過去の遺物ということではない。実は現在学校で使っている(学校文法の)語順についての5文型や品詞(名詞とか動詞など)は伝統文法のもたらしたものである。このアプローチは、(記述的ではなく)「規範的」で教育用のお手本として言語使用を規制するものであった。

19世紀になって、スイスの言語学者ソシュール(**Ferdinand de Saussure, 1857–1913**)の出現が言語学に大きな影響を与えた。彼は近代言語学の祖といわれ、言語研究を(それまでの歴史言語学中心の傾向に対して)記述言語学へと向かわせた。その当時個別的なもの寄せ集めだった記述に、構造や体系の重要性を強調し**構造主義言語学の祖**とも言われる。彼の影響で、それまで一括してとらえられていた「文法」も、統語論や形態論や意味論などに細分化されるようになった。彼の影響は特にヨーロッパの構造主義言語学にみられるが、**アメリカ構造主義言語学**もその流れをくんで、独自に発展していった。

アメリカ構造主義言語学は、ネイティブアメリカンの未知の言語分析に多くの時間を費やした。帰納的アプローチで、データをなるべく多く集め客観的に分析する方法がとられた。音(=音素)の分析から始め、それが終わってから形態素へとレベルを上げて行く手法をとり、機械的で意味は

なるべく排除するやり方であった。その結果「音素論」（現在の「音韻論」）にもっとも功績があり、意味論ではあまり目立った活躍はなかった。言語は意味の伝達が目的なので、彼らの即物的で機械的な手法はもともと問題があると見る人も多い。しかし構造言語学の考え方を教育に応用した**文型練習（pattern practice）**や**模倣・記憶教授法（mim-mem method）**は、今でもよく語学の学習時に使われる手法である。

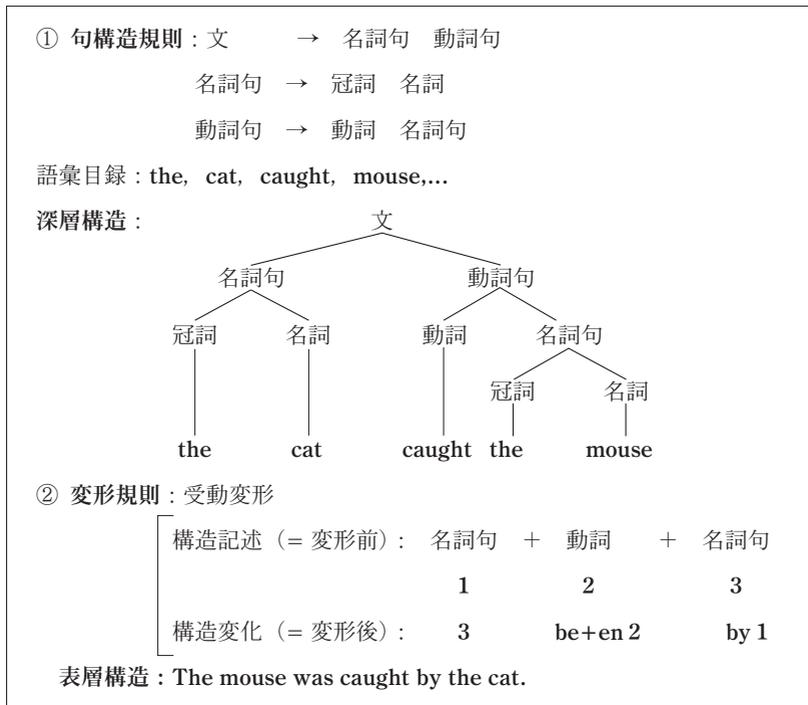
1950年代後半に、**チョムスキー（Noam Chomsky, 1928-）**理論が出て、言語学界に激震が走った。彼の核にある考えは**普遍文法**の解明である。普遍文法というのは、人間の言語に存在するといわれる普遍的な性質のことである。つまり、普通の能力のある人間であれば子供のうちに言語を獲得するわけだが、人間の脳には生まれつきことばを覚える能力がそもそも備わっている、と考える。頭の中に組み込まれている文法こそが普遍文法なのである。それが日本語の環境であれば日本語を、英語の環境であれば英語を母語として獲得し具現化されるだけのことである、という考えなのである。この普遍文法の構築こそが彼の壮大なテーマであり、それまでの文法とは意味合いが大きく違うのである。彼は**生成文法（generative grammar）**というものを唱え、人間の言語能力を説明しようとした。彼のアプローチは**演繹的**で、構造言語学の帰納的手法とは鋭く対立する。つまり仮説を立て実証し、もし反証が出てきたら、理論を組み替えるというやり方である。



## 4.2. 変形生成文法とその後

もう少し詳しく説明すると、チョムスキーの初期理論の枠組みでは「句構造規則」, 「深層構造」, 「変形規則」それに「表層構造」というものを仮定している。変形操作が入っているので**変形生成文法 (transformational generative grammar)** とよばれる。まず句構造規則で文法の大体の骨組みを作り、語彙を入れると深層構造という少し抽象的な構造ができる。そしてそこに変形規則をかけると表層構造、つまり私たちが発する実際の文ができあがるということになる。具体的に, “The mouse was caught by the cat.” という文ができる過程は、簡略してつぎのように表せる。

### 変形生成文法 (統語部門) の実例



左図の①「句構造規則」はルールの集まりである。たとえば一行目は「文→名詞句 動詞句」で、文は名詞句と動詞句に分解することを示す。その下の「語彙目録」では具体的な語彙を当てはめる。それらの操作で出てきたのが深層構造に表されている（ここでは見やすく「枝分かれ図」で示してある）。つぎに、②「変形規則」で受身形にする（能動態のままでも意味を成すので、この規則はオプションである）。変形操作でできあがった文が表層構造に示されている。

チョムスキーは統語構造を中心に彼の理論を展開しているが、意味を中心に据える考え方も、対峙する理論として当時注目された。実はシカゴ大の私の恩師、マコーレー（James McCawley）教授は MIT でチョムスキーの直弟子で、深層構造にこそ意味のレベルが存在するという生成意味論（generative semantics）を打ち出した代表者のひとりである。

チョムスキーは**1965年に標準理論（standard theory）**（*Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.:The MIT Press 参照）を確立した後も修正を加え、拡大標準理論へ、そして原理とパラメータ理論の手法へと移り、1990年代にはミニマリズム（極小主義）へと枠組みを変えていった。彼の研究プログラム、**ミニマリストプログラム（minimalist program）**は経済性という概念を言語理論に取り入れ、自然言語の文法は必要最小限の文法装置だけで構築されたものでなければならない、としている。この枠組みには初期に最も重要視された深層構造と表層構造の区別がなく、構造としてあるのは論理形式のみである。

このようにチョムスキー理論は形を変えながら、現在でも理論言語学の中核にいますが、本腰を入れて学習するとすれば、やはり古典的な生成文法の標準理論から入ることをお勧めする。

文献案内（生成文法関係）：

□ *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.:The MIT Press. 1965.

□ 『文法理論の諸相』 研究社出版, 1970. (上述書の翻訳)

- 『生成文法が分かる本』町田健，研究社出版，2000。（初心者向け）
- 『ミニマリスト統語論』A.ラドフォード著，外池滋生ほか訳，研究社出版，2000.

## 5. 意味論と語用論

### 5.1. 意味論と語用論の違い

ことばの意味を研究する分野には**意味論**と**語用論**がある。意味論では辞書的な意味を扱う一方，語用論ではコンテキストを考慮した話し手の視点が入った意味を扱う。著名な意味論学者リーチ（**Geoffrey N. Leech**）によると，それぞれの分野では「意味」は次のようになる。

意味論：**X means Y.** （XはYを意味する。）

語用論：**Speaker means Y by X.** （話者はXによってYを意味する。）

非常に簡潔に2分野の特徴をおさえていて，分かりやすい定義である。それでは，つぎの「意味」はどちらの分野で扱うのが，より適切か考えてみよう。

- ① 英語には {un-} という形態素を付加して反対の**意味**を表す語彙がたくさんある。
- ② 知人が「君は来なくても大丈夫だよ」と私に言ったのは，実は，来てほしくないという**意味**だった。
- ③ ドイツ語の“hund”と日本語の「犬」は同じ**意味**である。
- ④ テレビのリポーターが，「彼は近々そこを訪ねるかもしれません」と言ったのは，森さんが2月中に青森に謝罪に行く可能性がある，という**意味**だった。

既に察しはつくと思うが，上記の①と③は，誰がどこで辞書を引いても同じ結果が出るので，意味論に属する。その一方，②と④は文脈によって，

あるいは話者によって意味が違ってくるので語用論で扱う。特に④の「彼」、「近々」、「そこ」のような表現（直示、またはダイクシスという）が実際に指すものは無限大なので、脈絡を考慮しないとメッセージとして用をなさない。

## 5.2. 語彙の意味（意味論）

意味論の中核を成すのは**概念的意味**である。それは別名、論理の意味、知的意味、外延の意味ともよばれる。語のレベルでの概念的意味を概説する。語彙に付随する意味素性をプラスとマイナスの二分法で表し、各語彙をお互いに区別する**成分分析（componential analysis）**という方法がある。たとえば、womanという単語を意味素性に分解して[-male], [+adult]…とすることによって man ([+male]) や girl ([-adult]) という語彙から区別できるわけである。

成分分析は単語どうしの対立を表すには便利な方法であるが、語彙どうしの意味記述を**同意語**や**反意語**などで表す方法も学習者にはおなじみである。同意語関係はたとえば、文体の違いに表れる——たとえば ask（本来語で口語的）、question（古フランス語より借入、文学的）、interrogate（ラテン語より借入、学術的）はそれぞれニュアンスが異なる。

反意語に関しては、語彙どうしの意味の関わり方によって**段階別**、**相補的**、**関係反義的**などに分けられる。まず、段階別反意語というのは該当する2つの反意語以外にも同じスケール上に別の語彙が中間的、段階的に存在する関係のものを指す。たとえば、hot と cold, heavy と light はそれぞれの関係に中間的状態を許す語彙であることは明白であろう。

それに対し、相補的反意語はお互いを否定し、非段階別に対峙する2つの語彙である。たとえば、present と absent はお互いに背反的であり、それ以外にはない（授業時の代返は不思議な状態を作り出している?!）。また single と married もこの関係の語彙で、現在の状態のみを対象にしているので過去に divorced（離婚した）かどうかという問題は除外される。

さらに、関係反義的な反意語は、同じ関係を反対の視点から見た場合に生じる2つの語彙である。例として、sell と buy がある—— A氏がB氏に sell したという事実は、反対側から見れば、B氏がA氏から buy したということになり、別々の行為ではない。別例として、right と left や above と below も同じ関係にある語彙である。

### 5.3. 意味変化（意味論）

語彙の意味が変化していくことは、社会現象として運命づけられている。まず、時代を経て**意味が拡大**されているものがある。たとえば **bird** は今では小鳥全体を指すが、古英語の時代は意味がもっと限定されており、「若い鳥」のみを指していた（ちなみに古英語では *brid* といい、音位転換されて *bird* となった）。

その反対に**意味の縮小**もある。語彙 **meat** は古英語では（*mete* という綴り）「食物」全体を指していたが、13世紀より肉を指すようになった。同様に **deer** も古英語では（*dēor* という綴り）「動物」全体を表していたが、現在では意味の縮小により特定の動物のみを指すようになった。

**意味が悪化**したものもある。古英語では **cunning** は「知恵のある」という意味だったが、しだいに悪い意味で使われ始め、今ではずるいとか悪賢いという意味に変化した。ちなみに日本語でいう「カンニング」は和製用法で、英語では *cheating* という。

逆に**意味の向上**というものもある。**nice** という語彙はその典型で、ラテン語の *nescire*（知らない）に由来する（*ne-* は「無い」で、*scire* は「知っている」の意味）。つまりこの単語は「おろかな」というのが原義で、その後「気難しい」「詳細にこだわる」「手の込んだ心配り」という意味を経て、「素敵な」に変わった、という長い歴史を持っている。

### 5.4. 発話行為（語用論）

つぎに語用論だが、ここでは古典的な論文に触れておこう。この分野で

は発話における意図とその効果を研究するが、1962年にオースティン (John Austin) は**発話行為** (speech acts) を次の3つの側面に分類している。

- ① **発語行為** (locutionary act)
- ② **発語内行為** (illocutionary act)
- ③ **発語媒介行為** (perlocutionary act)

①はことばを発する行為そのものを指し、②はその発話により、「主張」や「約束」のような何らかの効力を伴う行為を指し、③はその発話の結果、聞き手の感情や行動に影響を及ぼす行為を指す。

たとえば、私が “I'll play table tennis with you tomorrow.” (「明日、君と卓球をしよう。」) と言ったら、この文を発音するという①「発語行為」によって、「約束」という②「発語内行為」をしたことになる。さらにそう言うことによって聞き手の卓球マニアを喜ばせたとすれば、③「発語媒介行為」が遂行されたということになる。

### 5.5. 協調の原理 (語用論)

語用論の別の研究を紹介する。1975年にグライス (Henry Grice) は “Logic and Conversation” (in *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. P. Cole and J. L. Morgan (eds.). New York:Academic Press) を発表した。その中で彼は、会話は話し手と聞き手との協力的な作業であり**協調の原理**を遵守して発話している、と考えている。彼はつぎの4つの**会話の公理** (conversational maxims) を設定して発話者の、より具体的な基準を示した。

### グライスによる会話の公理

- ① 量の公理 (The maxim of quantity)  
必要とされるだけの情報量を伝えなさい。
- ② 質の公理 (The maxim of quality)  
偽りであると信じるようなことを言わないこと。
- ③ 関連性の公理 (The maxim of relation)  
会話の内容に関係のあることを述べなさい。
- ④ 様相の公理 (The maxim of manner)  
表現の不明瞭さを避け、簡潔に、順序正しく話しなさい。

たとえば、つぎの2つの対話はそれぞれどの公理に違反しているか考えてみよう。

1. (Aは大体の時間を知りたがっている。)

A : What time is it?

B : Eight thirty-one and twenty-five seconds.

2. A : What do you do?

B : I bought a good electronic dictionary.

上の1は、「量の公理」への違反である。Bの返事が「8時31分25秒」と、普通の会話では、異常に細かすぎる。つまり情報の与え過ぎといえる。一方2は、「関連性の公理」に違反している。AはBの職業を尋ねているのに、Bは良い電子辞書を買ったことを伝えている。一般的にはわけのわからない返答である。Bの発話がAの質問に関係あるようには思えない。

その後、グライスの協調の原理に対して、後続する研究者たちの追加・修正がある。たとえばリーチは「丁寧さの原理」を付け加え、対人関係の言語運用を強調した。

## 6. 社会言語学

1950年代後半からの言語学はチョムスキーの影響が強く、言語学では完全に均質な言語社会を想定したうえで理想的な話し手・聞き手の**言語能力 (competence)** を主に研究すべきだと主張していた時代であった。これに対し社会言語学者たちは、彼の立場を抽象的で実体の無い研究だと非難し、いろいろな人びとが実社会で使用する**言語運用 (performance)**こそが研究の対象にされるべきであると主張した。今もこの基本的な考えに立脚していることは言うまでもない。**社会におけることばの実態を研究する**のが社会言語学である。

### 6.1. 方言

社会言語学でまず思いつきやすいのが、**方言 (dialect)** ということであろう。方言といえは、地方独特の言い回しのことと同義語に思われがちだが、方言にはいろいろな種類がある。たとえば、各地方特有の方言を**地域方言**といい、社会の階級で分かれている方言を**社会方言**、そして人種や民族によってそのグループ内に共通する方言を**民族方言**という。

#### 6.1.1. 地域方言

地域方言に関しては、**アメリカ合衆国の方言分布**は比較的理解しやすい。大きく分けて3つの方言が確認されている。国の歴史が始まった東海岸、ニューイングランド地方の**北東部方言**、ゆったりとした話し方 (/æ/→ [æjə], /e/→ [ejə], /i/→ [ijə] のように短母音が二重母音化するような Southern Drawl が特徴) が印象的な**南部方言**、そして残りの広大な土地で話される**中西部方言**である。日本の地域方言の多さと比べれば、米国はその25倍の土地がありながら、方言差は格段に少ない。これにはまず、米国の歴史が建国後230年程度と浅いということ、そして人口移動とその広が

り方が急速だったことなどが要因としてあげられる。

### 6.1.2. 社会方言

今度は、社会方言について触れておこう。方言調査の古典として、ラボフ (William Labov. *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. 1972) によるニューヨーク市 (NYC) の /r/ 音の例をあげておく。

第二次大戦後 NYC 地域では、母音に後続する /r/ 音を発音することが高い評価を受けるようになったのだが、ラボフは3つのデパートを選び、店員がこの音を発音するかどうかデータをとったのである。それらの店は客の階層に差がある Saks Fifth Avenue (富裕層の客が多い)、Macy's (中産階級層)、それに S. Klein (労働者階級層) である。各デパート4階の店員から “**Fourth floor.**” という答えを2回 (合計4回の /r/ 音) 引き出す巧みな質問を用意して、つぎのような結果を得た。

NYCの3デパートにおいて、母音に後続する /r/ が発音される割合

	(上流層)	(中産層)	(労働者層)
	Saks Fifth Ave.	Macy's	S.Klein
調査対象人数 (人)	68	125	71
/r/を1回以上使用 (%)	<b>62</b>	<b>51</b>	<b>21</b>
<うち4回すべて使用 (%)>	30	20	4

この結果から言えることは、より高級なデパートの店員ほど、より頻繁に母音後の /r/ 音を発音しているということである。つまり、社会層と言語使用の相関性が明確になったという、意義深い調査であった。

社会方言の別例として職業に関連した特殊な専門語や隠語を紹介しておこう。外部者には分かりにくい表現が多いが、意味的に類推ができ納得させられるのもある。日本の伝統的な相撲にはつぎのような用語や隠語がある。

## 相撲用語・隠語〔抜粋〕（二所ノ関部屋提供）

**あんこ**：「あんこ型」ともいう。太っていること。魚のアンコウからの連想である。

**あんま**：下位力士が上位力士に稽古をつけてもらう事をいう。上位力士にとってはよいウォームアップになるので、体をほぐす、という意味からきた。

**お米（コメ）**：お金、お小づかい、給金などのことをいう。江戸時代の力士は、大名に抱えられて扶持米（ふちまい）をもらって生活していたところから、お金のことをお米という習慣が残った。また昔、給金が3両になるまでは親方からお米をもらったので、3両以下の相撲取りをお米相撲といった。

**かまぼこ**：稽古をさぼること。ずっと板ペイに背中をくっつけて立っているところから、板かまぼこを連想した言葉。

**こめびつ**：部屋の柱、稼ぎ手。文字通りドル箱のこと。

**星を残す**：勝ち越すこと。

**ぼんなか（盆中）**：気をきかすこと。気をきかしてとりもつこと。頼まれもしないのに負けてやる「片八百長」のことを「ぼんなか相撲」ともいう。バクチからきた言葉。気をきかして座をはずしたりすれば「ぼんなかわかる」気をきかさなければ「ぼんなかわす」。

**目があく**：初日から連敗していた力士が1勝目をあげること。「片目があく」ともいう。

社会方言の範疇には性差によることば遣いの違いもあげられる。特に注目されているのが女性に関することばである。これには2種類あって**女性に対してのことば遣いと女性が使うことば**の両方がある。

まず「女性に対してのことば遣い」について重要な史実は、女性解放を求めて1960年代後半から欧米を中心に盛んになったいわゆるウーマンリブ（Women's liberation movement）という**フェミニズム運動**であった。その中では女性が男女同権を訴え、それまでの男性中心の社会用語が多く非難されたのである。たとえば、女性もその職業や地位にあるのに、男性のみを表す **man** が付くことば（**mailman, chairman** など）や女性に特化した

接尾辞 **-ess** (**stewardess, waitress** など) が否定的にとらえられた。そして、女性のみが婚姻関係を示してきた **Miss** と **Mrs.** の区別。さらに女性の従属的な地位を表す **the man and his wife** のような表現など、枚挙にいとまが無い。このような圧力の中で、男性もその状況を把握しできるだけ中立的なことば遣いに理解を示すようになってきた。その言い換えの例をつぎに示そう。

(従来の語彙)		(中立的な語彙)
mailman	➡	mail carrier
chairman	➡	chairperson, the chair
fireman	➡	fire fighter
stewardess	➡	flight attendant
waitress	➡	server
Miss/Mrs.	➡	Ms.

差別をしないことば遣いはその対象が女性に限らず、他のグループにも適用されてきている。たとえば、社会的に弱い立場にある少数派としての扱いを強いられてきた人々の呼称も変化してきた。「年配者」は **senior citizen**, 「身体障害者」は **physically challenged person** というように。こういう**非差別語**を一括して**PC語**と呼ぶが, politically correct (政治的に正しいと認められた, の意味) の頭文字語である。

「女性が使うことば (=女性語)」は30年以上前から本格的に研究されてきた。きっかけとなった文献は、レイコフ (**Robin Lakoff**) の **Language and Women's Place** (New York: Harper and Row. 1975) という薄手の本である。この中には女性の特徴とされることば遣いの例が数多く書いてあって分かりやすい記述になっている。たとえば、女性は主張する調子ではなく、聞き手の同意を求めるような**付加疑問文**を、**上昇調のイントネーション**で使う傾向がある (例: John is here, isn't he? ↗) という。また、

強い感嘆詞（‘damn’ や ‘shit’ のような four-letter words）を避ける傾向にあり、自分の気持ちを押さえ気味に話す「ヘッジことば」（‘well’ や ‘kind of’ や ‘sort of’ など）も多用するという（ちなみに、日本語の「ぼかし表現」〈～みたいな、～とか〉もヘッジことばである）。

しかし、彼女の記述は的を射たもの多いにしろ、だいたい自分の主観や経験によって書いているので実証が必要とされた。それにレイコフの主張は男性語に比べ、女性語に社会的正位置を与えてはいないようだ。

これに対し彼女の影響も受けたタネン（Deborah Tannen）は彼女の書、*You Just Don't Understand*（New York: William Morrow and Company. 1990）で、女性語は男性語に劣るものとは考えず、あくまでスタイルの違いだと主張した。彼女曰く、男性の話し方は相手に勝つ、「競争」を意識したもので、女性の話し方は協力的に「調和」を意識したものだという。タネンの影響は現在にも引き継がれ、彼女の研究はロックフェラー財団や全米科学財団などからも支援を受けている。彼女はさらに海外でもよく知られ、この本は日本でも教養課程の英語テキストとして編集されている（原著10章中3章のみを採用し注解をつけたものが1992年、英宝社から出版されている）。

## 6.2. 和製英語

「和製英語」（Japanese English）はおそらく言語学のいろいろな分野に属する可能性がある。ここでは日本社会における独特のことばや言い回しとして、社会言語学の枠内で説明してみる。和製英語ということばは実は外来語との境がはっきりしていない部分がある。「パソコン」はどちらなのか。「リフォーム」や「ワンルームマンション」はどうなのか。どれも英語らしい形態をしているが、このままでは発音や意味が通じないか、誤解されるものばかりである。どれも元の語彙は英語の語彙だから、外来語だといっていいのか、というとそうはいかない。ワンルーム（一部屋）のマンション（豪邸）というような、相反する意味の組み合わせなどあり得ない。

そうなると和製英語の定義はこちらで用意するしかない。ここでは、「**構成する語彙（群）は英語であるが日本語独自の意味的基準で作られていて、英語には存在しない語彙（群）**」をそう呼ぼう。

その基準でいくとカタカナ英語は外来語，和製英語，和製英語用法語彙の3種類に大別される。まず「パソコン」であるが，原語の personal computerとの意味的差異はない。従ってこれは和製英語ではなく，英語を使いやすく（4拍に）省略した外来語ということになる。つぎに「リフォーム」は英語では，（制度を）改革する，改心する，の意味で，日本語のように，改築するという意味はないから，外来語と和製英語の中間的存在（＝和製英語用法語彙）。さらに「ワンルームマンション」はこの語彙の組み合わせ自体英語にないので，和製英語となる。

その他に，通じないあるいは誤解されるカタカナ英語とそれに対応する，通じる表現をいくつか下に示しておく。

(和製英語・和製英語用法語彙)	(対応する正規の英語語彙)
アイスクャンディー	popsicle
ガソリンスタンド	gas station, service station
シャープペンシル	mechanical pencil
ソフトクリーム	soft-serve ice cream
ワンルームマンション	studio apartment

和製英語や和製英語用法語彙は，手がつけられないほどやっかいな社会問題になった。イメージ先行で，マスメディアや業者が勝手に横文字を濫用した結果，英語とはかけ離れた別の言語を作ってしまった。学習者は，カタカナ語はそのまま英語にして通じるのか，まず疑ってかかるくらいの覚悟が必要である。その上で，通じる英語を辞書やカタカナ語用語関係の文献で確かめてほしい。二度手間になるが，今のところその解決法しかない。最後に宿題を出しておこう——「スキンシップ」や「ハートフル」と

いう語彙は英語だろうか。

文献案内（言語学・英語学一般）：

- An Introduction to Language* (7th edition) .V. Fromkin, R. Rodman & N. Hymes. Heinle. 2003. (米国の大学でも、教科書として使用)
- Linguistics*. Jean Aitchison. Teach Yourself; 6Rev Ed edition. 2003.
- 『はじめての言語学』黒田龍之助，講談社，2004.
- 『現代の英語学』石黒昭博ほか，金星堂，1999.
- 『言語学入門』田中春美ほか，大修館書店，1990.
- 『現代の言語学』石黒昭博ほか，金星堂，1996.
- 『えいご・エイゴ・英語学』稲木昭子ほか，松柏社，1995.
- 『言語学とは何か』田中克彦，岩波書店，1993.